



先月に続き、マドレーヌの挿話を読みます。紅茶に浸したマドレーヌを契機にして蘇るのは無意識的記憶です。「スワン家のほうへ」の翻訳は1929年に雑誌連載で開始され、単行本としては1931年の淀野隆三・佐藤正彰訳が最初ですが、もっとも早い時期に出た研究書の一つ、1934年刊行の『プルースト研究第三号』（作品社）で私の恩師の一人、根津憲三先生が書いておられる表現に従えば「この記憶喚起は忘却されてゐた内容の自発的な、突如とした、偶然的な甦生である」ということになりましょうか（意外なことに、我が国の初期の評論ではこの挿話に触れた方はそれほど多くはありませんでした）。

Et tout d'un coup le souvenir m'est apparu. Ce goût c'était celui du petit morceau de madeleine¹⁾ que le dimanche matin à Combray (parce que ce jour-là je ne sortais pas avant l'heure de la messe), quand j'allais lui dire bonjour dans sa chambre, ma tante Léonie m'offrait après l'avoir trempé dans son infusion de thé ou de tilleul²⁾. La vue de la petite madeleine ne m'avait rien rappelé avant que je n'y eusse goûté³⁾; peut-être parce que, en ayant souvent aperçu depuis, sans en manger, sur les tablettes des pâtisseries, leur image avait quitté ces jours de Combray pour se lier à d'autres⁴⁾ plus récents; peut-être parce que de ces souvenirs abandonnés si longtemps hors de la mémoire, rien ne survivait, tout s'était désagrégé; les formes — et celle aussi du petit coquillage de pâtisserie, si grassement sensuel, sous son plissage sévère et dévot — s'étaient abolies, ou, ensommeillées, avaient perdu la force d'expansion qui leur eût permis de rejoindre la conscience. Mais, quand d'un passé ancien rien ne subsiste, après la mort des êtres, après la destruction des choses, seules⁵⁾, plus frêles mais plus vivaces, plus immatérielles, plus persistantes, plus fidèles, l'odeur et la saveur restent encore longtemps, comme des âmes, à⁶⁾ se rappeler, à attendre,

à espérer, sur la ruine de tout le reste, à porter⁷⁾ sans fléchir, sur leur gouttelette presque impalpable, l'édifice immense du souvenir.

訳 そのとき突然、思い出が姿を現した。これは日曜の朝、コンブレーで（というのも、日曜日はミサの前には外出しなかったからだ）、レオニ叔母の部屋へおはようを言いに行ったときに、叔母がいつも飲んでいる紅茶が菩提樹^{テイユール}のハーブティーに小さくちぎって浸し、私に差し出してくれたマドレーヌの味だった。見ているだけで味わうことがなければ、プチット・マドレーヌは私に何も思い出させることはなかった。その理由は以下のように考えられるかもしれない。つまり、それ以後、お菓子屋の棚の上で見かけることはあっても、食べたことはなかったのも、その姿はコンブレーの日々を離れて、もっと最近の他の日々と結びついた。これがひとつ。そして、かくも長い間記憶^{らちがい}の埒外にうち捨てられていたこうした思い出は、すべて瓦解してしまって、あとには何も生き延びなかった。これが二つ目ということになるだろうか。それらの形——謹厳で敬虔とすら言える筋に隠れて、あれほど官能的なまでにむっちりとしたお菓子屋の小さな貝殻の形もそうだが——は、姿を消すか眠り込むかして、膨張する力を失い、意識まで到達することができなかったのだろう。だが、命ある存在が減び、事物が破壊されたあと、古い過去から何も生き延びることがなかったときでも、はるかに弱々しげでありながら、ずっと強靱にして非物質的な、もっと執拗で忠実なもの、すなわち、匂いと味だけがなおも久しい間、魂魄^{こんぱく}さながらにとどまって、他のすべてが廃墟と化したその上で思い起こし、待ち望み、期待し、たわむことなく、匂いと味のほとんど感知できないくらい小さな滴^{しずく}の上で支えるのだ、思い出の壮大なる建築物を。

注 1) 本稿ではこの部分に合わせて「小さくちぎって」を加えたが、小説の翻訳としてはそれは省いてもいいかもしれない。2) 辞書には「科木^{しなのき}」「菩提樹」などとあるが、「科木」Tilla japonica は日本特産種であることからして、1931年の翻訳以来鈴木訳まで、ことごとく漢字か漢字・平仮名混濁で「菩提樹花」「菩提樹」「ぼだい樹」と訳されてきた。地域差があるため、植物の訳語はことのほか難しいのだが、tilleulの独訳がLindenbaum（シュューベルトでもご存じですね）であることからしても「菩提樹」はすでに定訳になっていると私は判断した。なお、tilleulはfidélitéとlongévitéの象徴であることをどこかで意識しておくとも興味が増すのではなかろうか。3) avant queのあとには接続法。ここではgoûterの接続法大過去。「完了」を表す。goûter à「～を食べてみる」「味わう」。4) d'autres joursの意。5) 次の行の、l'odeur et la saveurにかかる。frêles以下、5つの形容詞も同様。6) rester à「～したままにいる」。7) à se rappelerからà porterまで4つの動詞が同格に置かれ、どれもが最後のl'édificeを直接目的語としている。

プルーストの一文は長いものが少なくないのですが、因数分解のように、括弧をつ

けたり、同格は何か、文の骨格をなしているのはどこかを考えると、意外にすんなり理解できると思います。どうか鉛筆を持って、どれが主文か、どこが修飾節か、「因数分解」しながら、印を付けつつ、読んでみて下さい。

Et dès que j'eus reconnu le goût du morceau de madeleine trempé dans le tilleul que me donnait ma tante (quoique⁸⁾ je ne susse pas encore et dusse remettre⁹⁾ à bien plus tard de découvrir pourquoi ce souvenir me rendait si heureux), aussitôt la vieille maison grise sur la rue, où était sa chambre, vint comme un décor de théâtre¹⁰⁾ s'appliquer au petit pavillon¹¹⁾, donnant sur le jardin, qu'on avait construit pour mes parents sur ses derrières¹²⁾ (ce pan tronqué que seul j'avais revu jusque-là); et avec la maison, la ville¹³⁾, depuis le matin jusqu'au soir et par tous les temps, la Place où on m'envoyait avant déjeuner, les rues où j'allais faire des courses, les chemins qu'on prenait si le temps était beau. Et comme dans ce jeu où les Japonais s'amuse à tremper dans un bol de porcelaine rempli d'eau, de petits morceaux de papier jusque-là indistincts qui, à peine y sont-ils plongés s'étirent¹⁴⁾, se contournent, se colorent, se différencient, deviennent des fleurs¹⁵⁾, des maisons, des personnages consistants et reconnaissables, de même maintenant toutes les fleurs¹⁶⁾ de notre jardin et celles du parc de M. Swann, et les nymphéas de la Vivonne, et les bonnes gens du village et leurs petits logis et l'église et tout Combray et ses environs, tout cela qui prend forme et solidité, est sorti, ville et jardins, de ma tasse de thé.

訳 そして、叔母が私にくれた菩提樹のハーブティーに浸したマドレーヌのひと切れの味を私が認めるや否や（その思い出がなぜ私をあれほど幸福にしたか、そのときの私にはまだわからなかったのも、その説明はもっとあとまで待たなければならなかった）、すぐに、叔母の部屋のある、道路に面した古い灰色の家が、私の両親のために庭に面して建てられた母屋の裏の小さな離れ（私がそれまで思い出していたのは、他と切り離されたこの離れの一角だけだった）と、芝居の書き割りのようにつながった。家とともに町が（朝から晩まで、さまざまな天候のときの姿のまま）、昼食前によく行かされた中央広場が、買い物をしに行った通りが、天気がいよるときにたどった道が現れた。日本人がよくする遊び——陶磁器のお椀に水を満たし、そこに、小さな紙片をいくつか浸して遊ぶのだが、水に沈めたと思うと、それまで何だかわからなかった紙片はたちまち伸び広がり、ねじれて、色がつき、互いに異なって、誰が見てもわかるしっかりしたかたちの花や家や人物になる、そんな遊びと同じように、いま、私たちの家やスワンの家の庭に咲くあらゆる花が、ヴィヴォンヌ川の睡蓮が、善良な村人たちが、彼

らの小さな住まいが、教会が、コンブレー全体とその周辺が——そうしたすべてが形をなし、鞏固なものとなって、町も庭もともに、私の一杯の紅茶から出てきたのである。

注 8) quoique のあとを接続法にして「～ではあるが」を表す。susse は savoir、dusse は devoir の接続法半過去。9) remettre à plus tard de ... 「～をあとに延ばす」。10) 「芝居の書き割り」「舞台装置」。s'appliquer 「びったりはまる」「張りつく」があるので、「書き割り」と訳した。要は、舞台で見る見るうちにある景色ができ上がることを思い出して下さればいい。11) *le Grand Robert* (GR) では、Petit bâtiment isolé; petite habitation, petite maison située dans un jardin, un parc, un bois ... と説明されている。12) GR で la partie opposée à la façade と説明されている。ses は de la vieille maison。13) la ville, la Place, les rues, les chemins が同格。vinrent, apparurent などを補えばわかりやすい。14) s'étirent 以下、deviennent まで5つの動詞が同格。15) des fleurs 以下、des personnage まで3つの名詞が同格。16) les fleurs, celles (=les fleurs), les nymphéas, les bonnes gens, leurs petits logis, l'église, tout Combray, ses environs が同格。tout cela でそれらすべてを受ける。動詞は est sorti。なお、訳11行目「それまで何だかわからなかった」を補訳として入れた。

如何でしたでしょうか。とくに、同格を重ねてゆくあたり、突飛な例かもしれませんが、古代の歌にみられる豊語法にも通じるような気がいたします。

プルーストの記者たち

プルーストの死の翌年、1923年に「囚われの女」の一節を訳して紹介した重徳泗水以降、プルーストを愛した人びとは多く、単行本では堀田周一訳『プルースト随筆』（1930。『愉しみと日々』に各種エッセイを加えたもの。目配りがみごとです）が出て、以後、さほど日を置かずして全訳の試みがなされます。1931年武蔵野書院刊の淀野隆三・佐藤正彰訳『スワン家の方 第一巻』の広告頁には「マルセル・プルースト全集 失ひし時を求めて」とありますし、1934年三笠書房刊の五来達訳には「プルースト全集 失はれし時を求めて」の予告広告が挟まっていました。とくに化学者・五来達による翻訳は、第1編以外にも第2編「花咲ける乙女の蔭に」、第3編「ゲルマントの方 1」、第7編「見出された時」が刊行されています。戦災で残りの部分の訳稿を焼失した時の五来氏のお気持ち考えると涙が出るほどです。そうしたあまたの先達の訳業に支えられながらの個人全訳です。これからも精進を重ねて参ります。

※原文は *Du côté de chez Swann, À la recherche du temps perdu*, Pléiade 版から引用。

※訳文は拙訳『失われた時を求めて 第一篇 スワン家の方へ I』（光文社古典新訳文庫）を使用。
（たかとお・ひろみ）